

Costume and Textile

No. 47

服飾文化学会会報

2024年3月

2024（令和6）年度 第25回服飾文化学会 大会のお知らせ

2024（令和6）年度 服飾文化学会 第25回大会を下記の通り開催いたします。5年ぶりの対面開催ですので多くの皆様にご参加くださいますようお願い申し上げます。

開催日 2024年5月18日（土）・19日（日）

開催校 文化学園大学

〒151-8523 渋谷区代々木3-22-1

【研究発表】

【作品展示】

【ポスター展示】

A館201教室

【自由見学】 文化学園服飾博物館

（5月18日（土）のみ開館）

1. 大会プログラム

5月18日（土）

13:00～14:50 研究発表

15:00～16:30 特別講演

演題「転換期における

ファッションビジネスと店舗戦略」

～アナログ・デジタル・サステイナブルの

未来～

講師 小松 浩一氏（文化学園大学教授）

16:30～17:00 総会

17:10～18:30 情報交換会（A館12階 学生ホール）

5月19日（日）

9:30～11:55 研究発表

11:55～12:55 昼食

12:55～15:45 作品展示・ポスター展示

ショートスピーチ・質疑応答

◆作品・ポスター展示期間は5/18（土）13:00～

5/19（日）15:45です。ショートスピーチは研究

発表会場（A201教室）で行います。

◆発表件数によっては時間変更が生じますので、後日配信のプログラムでのご確認をお願いいたします。

2. 参加申込・参加費

（1）参加申込・振込締切日2024年4月20日（土）

第25回大会ご案内メール、学会ホームページに記載されたGoogleフォームでお申込ください。

（2）参加費

大会参加費	会員	3000円
	非会員	4000円
	学生会員	1000円
	学生非会員	1500円
情報交換会費	会員	4000円
	非会員	4500円
	学生会員	2000円
	学生非会員	2500円
昼食代（5/19）		1080円

（3）振込先

参加申し込みのお知らせ時に連絡いたします。

3. 発表申込

（1）発表申込締切 2024年3月20日（水）

①既に送信いたしました第25回大会ご案内メールの「ポスター・作品展示発表者へのお知らせ」をご確認の上Googleフォームでお申し込みください。

②発表形式には、口頭発表・作品発表・ポスター発表の3種があります。

③発表は未発表の研究報告で、本学会会員に限られます（共同研究の場合は共同研究者も同様）。非会員で発表希望の場合は学会ホームページから入会手続きをお願いいたします。

(2) 要旨原稿締切 2024年4月20日 (土)

提出先 sunahase@bunka.ac.jp

- ①要旨 A4 縦置き、横書き、1枚
- ②余白 上25mm、下30mm、左右30mm
- ③文字 10.5ポイント、明朝体

4. 特別講演

◆講師 小松浩一氏
文化学園大学教授

◆演題
「転換期におけるファッションビジネスと店舗戦略」
～アナログ・デジタル・サステイナブルの未来～

5. 自由見学

- ◆文化学園服飾博物館
- ◆展示テーマ「“オモシロイフク”大図鑑」展
5月18日(土)のみ10:00～16:30
(16:00最終入館)

6. アクセス

JR(山手線・中央線・総武線・埼京線・湘南新宿ライン)、地下鉄(都営新宿線・都営大江戸線・丸ノ内線)小田急線、京王線
「新宿駅」南口より甲州街道を初台方面へ徒歩7分

服飾文化学会 第25回大会・総会 特別講演

Costume and Textile Costume and Textile Costume and Textile Costume and Textile

転換期におけるファッションビジネスと店舗戦略

～アナログ・デジタル・サステイナブルの未来～



Special lecture

2024
5.18 SAT
15:00
/
16:30

文化学園大学
A館 20階
A201 番教室

〒151-8523
渋谷区代々木 3-22-1

● 講義内容

ファッションビジネスは現在、大きな転換点にあります。それは単に持続可能、サステイナブルの問題だけでなく、川上・川中・川下に渡るファッション産業全体のあり方や、流行発信型の需要創出構造そのものが、少子・高齢化の中でデジタル化が進む令和の消費者のスタイルと乖離していることを意味しています。本講演では、伊勢丹をはじめ多くの商業施設の開発・リニューアルや顧客マーケティング、また企業コンサルティングに長年携わってきた立場から、産業としてのファッションビジネスをどうとらえ、他産業に並び得るビジネスとしていかに構築していくか、実践的な視点から問題提起を行います。そして、人材像や仕事像など、これからのファッションビジネスの担い手が持つべき発想と視点についてお話します。

● 講師プロフィール

小松 浩一 Hirokazu KOMATSU
文化学園大学 服装学部ファッション社会学科 教授

1961年 東京生まれ
1984年 慶応義塾大学 経済学部卒業
(株)伊勢丹(現三越伊勢丹)に入社 店頭経験の後、営業本部スタッフ
伊勢丹各店の再開発・リニューアルや新店開発(JR京都伊勢丹等)に携わるとともに、店舗運営の効率化・活性化策を実施。
2005年 営業本部 顧客政策担当部長
顧客マーケティング、購買データベース分析とその活用に取り組む
2011年 三越伊勢丹ホールディングス営業本部 店舗政策担当部長
グループ各店の活性化と再構築に取り組む
2015年 デジタル・E・C事業、宣伝C I管理、経営企画室等を歴任
2021年 (株)三越伊勢丹を定年退職
文化学園大学 非常勤講師(マーケティング)
2022年～文化学園大学 服装学部ファッション社会学科 教授

その他、中小企業診断士・一級販売士として
商店街活性化、各種企業の経営コンサルティング、講演、執筆を行う。



連絡先 服飾文化学会 第25回大会・総会実行委員会
文化学園大学 水谷みつ江 mizutani@bunka.ac.jp
砂長谷由香 sunahase@bunka.ac.jp

特集記事 「コスチュームジュエリー美の変革者たち シャネル、ディオール、スキャパレッリ、小瀧千佐子コレクションより」

京都文化博物館 林 智子

コスチュームジュエリーに特化した国内初の特別展「コスチュームジュエリー 美の変革者たち シャネル、ディオール、スキャパレッリ、小瀧千佐子コレクションより」が、2月17日より4月14日まで京都文化博物館において開催されています。

本展で紹介されるのは、コスチュームジュエリーの収集家であり研究者である小瀧千佐子氏のコレクションから選ばれた約450点の優品で、展覧会は3章で構成されています。

第1章は、コスチュームジュエリーの黎明期から第二次大戦後にかけての展開を、20世紀初頭のモード界を代表する3人のデザイナー、シャネル、ディオール、スキャパレッリの作品を中心に紹介しています。また、神戸ファッション美術館所蔵品よりシャネル、ディオール、スキャパレッリのスーツやドレス計6点を借用して展示しています。

この章で特に注目していただきたいのは、コスチュームジュエリーにアートの要素を取り入れたスキャパレッリの作品です。2022年、東京都庭園美術館の展覧会「奇想のモード」において、大きな存在感を放つドレスや帽子が展示されたスキャパレッリですが、その功績に比して日本での認知度はまだじゅうぶんとはいえないのではないのでしょうか。スキャパレッリをみいだしたポール・ポワレもまた、西洋服飾史における重要性は非常に高いにもかかわらず、じゅうぶんに知られているとは言い難いでしょう。本展覧会を通してより多くの方々にご覧いただきたいと思えます。

第2章はコスチュームジュエリーのヨーロッパにおける展開を追います。シャネルたちの活躍をうけて、1930年代にさまざまなオートクチュールメゾンがコスチュームジュエリーをてがけるようになり、それぞれ個性豊かに花開いていきます。ここで紹介されるデザイナーたちの中でとくに見逃さずにご覧いただきたいのはリーン・ヴォートランの作品です。日本での知名度は低いとおもわれますが、「メタルの詩人」とよばれたという彼女の作品には、現代の私たちにも強く訴えかけてくるメッセージ性があります。

第3章はアメリカに舞台が移ります。アメリカにおけるコスチュームジュエリーが、ファインジュエリーの伝統にしばられずに自由な発達を遂げ、やがて大企業による工場での大量生産による安価で品質の安定したコスチュームジュエリーが供給されるようになっていく過程を、現在日本でも人気の高いミリアム・ハスケルやトリファリの作品をとおしてご紹介しています。

関連イベントとしては、まず開幕当日の2月17日(土)にワークショップが行われました。事前募集による約30人の参加者(2回実施、各回16名)を対象に、小瀧氏によるヴェネチアンビーズについての解説と、ハート型のヴェネチアンビーズを用いたネックレスの制作が行われました。男性の参加者もあり、完成後には試着をしたり感想を交わしたりと、思い思いに楽しむ様子がみられました。

3月2日には、小瀧氏による講演会が行われ、事前応募による約150名の聴講者が熱心に聞き入っていました。講演の後にもうけられた質疑応答の時間には聴講者から様々な質問が寄せられ、個人の装いに関すること(「センスの磨き方」など)から、大きなテーマ(「日本のコスチュームジュエリーの未来」など)まで、来場者の関心がひろい範囲にわたっていることがわかりました。3月30~31日には、別館ホールにて、「コスチュームジュエリーマーケット」と題するイベントが予定されています。近隣作家によるコスチュームジュエリーの販売と、事前予約不要のワークショップが行われます。

色、デザイン、材質もさまざまな装身具があふれる現代都市において、この展覧会をどうしたら上手にアピールしていくことができるか、不安もありつつ、陳列や広報に工夫をしてきましたが、展示会場やイベント会場ではお客様の充足した表情が見られ、報われる思いであります。

なお本展は、パナソニック汐留美術館で行われた東京展(2023年10月7日~12月17日)が第1会場で、京都会場は2会場めにあたります。京都会場の後に、愛知県美術館(2024年4月26日~6月30日)、宇都宮美術館(2024年9月8日~12月15日)、札幌芸術の森美術館(2025年4月19日~6月22日、予定)に巡回します。



展示会場の様子
(ドレス：神戸ファッション美術館所蔵)

2023年（令和5）度 研究例会の報告

2023年度研究例会は10月28日（土）にオンラインで開催されました。「留具から装飾品へと花開く帯留－産業財産権の出願記録からの探究－」と題して立命館大学衣笠研究機構 客員協力研究員、大阪商業大学非常勤講師高須 奈都子先生による講演が行われました。出席者は学会員と非学会員を合わせて42名でした。講演の内容は次の通りです。

（研究例会担当 宮武 恵子）

【研究例会講演概要】

「留具から装飾品へと花開く帯留

－産業財産権の出願記録からの探究－

高須奈都子（大阪商業大学非常勤講師）

この講演では、私の研究対象のひとつである帯留を通して、産業財産権資料の活用事例とその有効性についてお話しさせていただきました。

帯留の発生と進化

帯留とは、現代では結んだ帯の上を押さえ留める紐（帯締など）に通して使用する和装用の装飾品を指します。しかし、装飾品である帯留には、その名が示すような「帯を留める」機能はありません。

「帯留」の発生は、江戸時代中期以降の帯の変化に起因するとされています。江戸中期頃より、帯が長く、また幅広になったことで、様々な帯結びが考案されるようになりました。さらに、縹子などの滑りやすい帯地の流行により、結んだ帯が解けたり、ずり落ちたりしないようにするために、結んだ帯の上を押さえ固定する紐を使用するようになりました。

肉筆浮世絵や浮世絵版画を用いてその紐を確認すると、しごき紐、くけ紐、組紐、そして留金具付きの紐の4種類があったことが判ります。発生当初に「胴メ」「上メ」などと呼ばれていたこの4種類の紐は、やがて区別されることなく全て「帯留」と呼ばれるようになります。

今日私達が帯留として認識しているものは、この「帯留」の中の留金具付きが進化したものであるというのは、見た目の上からも容易に推察することが出来ます。金具付き以外の「帯留」は、その役割を特化させて、今日帯締や帯揚と呼ばれている帯結びの補助具へと変化していきますが、それについてはこの講演では割愛します。

「帯留」という言葉の初出は、文政5（1822）年刊の墨川亭雪磨作『小柳縹阿娜帯止』と言われており、その序文から、文政の頃には金具付きの帯留も発生していたと考えられます。私が行った浮世絵調査でも、所蔵館により文化末頃に描かれたとされる作品1点、文政のものとしてされる作品5点で留金具付きの帯留が確認され、それを裏付けることが出来ました。

初期の留金具付き帯留の金具部分は、現存する実作品や、江戸時代後期（1800年代）に貴志朝暉（忠美／

孫太夫）が記した書写資料『鶴真似双紙』の「帯留」の図などから、当時既に流行していた袋物の留金具などが流用されたと考えられます。

江戸時代に発生した「帯留」のうち、留金具付きの帯留は、花街の女性達を中心に流行が始まったようですが、明治時代になり、維新の混乱が落ち着くと、幅広い階層の女性達の間で流行するようになります。

現存する作品を集めて、その留金具を分類すると、大きく4つの様式に分けられることがわかります。一つは、江戸時代発生当初から見られる、紐の両端につけられた留金具の突起を嵌め合わせて留める、その嵌め合わせる時の音から「パチン式」と呼ばれているものです。次に、紐の両端の金具のうち片方が掛け金具になった「掛け金具式」。そして、装飾部裏には紐通しがあるだけで、通した紐の両端に掛け金具を取り付けた「紐通し式+掛け金具」、さらには紐通しのある装飾部のみになった「紐通し式」の4つです。

この4つの様式の変遷については、絵画や文献資料（各種記録、雑誌記事、書籍など）、また明治時代以降はそれを製造したり販売したりしていた商店の広告やカタログ類、さらに実作品から得られる情報（銘などの刻印、箱書きなど）をもとに、ある程度掴むことが出来ます。

先述したとおり、パチン式帯留は、文化・文政の頃には発生していましたが、大川新吉『東京百時流行案内』（明治26／1892年刊）には「パチンは明治八九年以来昨今まで非常の勢力なりし」との記述があり、本格的な流行は明治8（1875）年頃から始まって、それが書籍の刊行時にも続いていたことがわかります。雑誌広告や小売店の商品カタログなどを確認すると、明治30年代後半までパチン式の商品がみられるので、その頃までパチン式が様式の主流であったといえるでしょう。

パチン式の特徴は、留金具のほぼ全体が金属で作られており、非金属材料を使用する際には本体の金属に埋め込むような作りとなっていることです。これは、帯留の本体が装飾であると同時に留金具としての機能も持つため、負荷に耐える堅牢な材料で制作する必要があったためだと考えられます。

また意匠については、刀装具や袋物の金具をそのまま流用したような家紋や日本の伝統的な動植物をモチーフにしており、比較的小さなサイズのものが多く見られます。

掛け留め式は、明治30年代後半頃から広告などに見られるようになり、大正時代末期には「紐通し式」の広告が見られることから、明治後期から大正末期に作られていたと推察されます。

掛け留め式も、本体に留金具としての機能があるため、基本的に全体を金属で作られ、パチン式同様に非金属材料は金属で作られた本体に埋め込んで使用されています。

意匠は伝統的な動植物に加え、季節感のあるもの、趣味性の高いもの、着物でも流行がみられたアールヌーボー様式の影響を受けたものなど、パチン式より

もモチーフの幅が広がりました。また大きさも、パチン式に比べ横長になったものや、やや大振りで重厚感のあるものが見られるようになります。

紐通し式は、大正末期以降の広告などで見られるようになりますが、当初は通した紐の両端に取り付けられた掛け金具で、「帯留」本体が無くした「留める機能」をカバーしていました。しかし、やがてその掛け金具も無くなり、帯留は留める機能を無くした純然たる装飾品となります。

留める機能を無くしたことで、紐通し式の帯留は材料の自由度が高まり、象牙や樹脂など、それまで使用されてこなかった様々な材料が使われるようになります。

意匠も、パチン式や掛け留め式でみられた意匠に加え、モダンやハイカラといった感覚的な要素を取り入れた枠に捉われない自由な意匠が見られるようになり、大きさも小さいものから大きいものまで様々作られ、総じて多様化しているといえます。

産業財産権資料の活用事例

このように既存の資料からもある程度帯留の変遷が判るのですが、産業財産権資料を組み合わせて、さらに詳しく、正確に、それらの特徴を知ることが出来ます。

産業財産権とは、知的財産権のうち、特許権、実用新案権、意匠権、商標権の4つで、特許庁が所管しています。

産業財産権制度は、新しい技術、新しいデザイン、ネーミングなどについて独占権を与え、模倣防止のために保護し、研究開発へのインセンティブを付与したり、取引上の信用を維持したりすることによって、産業の発展を図ることを目的としています。これらの権利は、特許庁に出願し登録されることによって、一定期間独占的に使用できる権利となります。

日本における産業財産権の本格的な運用は、明治17(1884)年の商標条例の公布に始まり、18(1885)年の専売特許条例、21(1888)年の意匠条例、38(1905)年の実用新案法の公布へと続きます。

各法の公布以降、それぞれの出願については、独立行政法人工業所有権情報・研修館が運営する「特許情報プラットフォーム」を活用することで確認することが出来ます。(検索方法など詳細は<https://www.j-platpat.inpit.go.jp/>を参照)

例に示す帯留の出願(昭和4年実用新案出願広告第2894号「帯止メ装身具」)の通り、産業財産権の出願文書には、対象物の名称、申請者・開発者の氏名や住所、具体的な仕様(説明文と図)、開発の目的などが明記されています。これらは公的な文書であり、十分に信頼のおける資料として研究にも使用することが可能と考えます。

では、産業財産権の出願記録からどの様なことがわかるのか、帯留を例に具体的にいくつかの事例をご紹介します。

まず、絵画や文献資料、広告・カタログ類、現物調査などで不明確であった情報の補足が可能です。例え

ば、作られた具体的な時期や作られた理由などは、それに類似した出願を見つけることが出来れば、その資料から明確にすることが可能です。帯留の場合、実際に出願されたものがどの様式に相当するかを確認し、その分布を見ることで様式変遷の時期がより明確になりました。また、非金属材料を使用する際の工夫や、紐通しの形状の違いの意味など、これまで使用してきた資料では判らなかったことも明らかにすることが出来ました。

また、現物調査で生じた疑問(例えば、特殊な構造をしており使用方法がよく判らなかったものなど)も、特許や実用新案の出願を確認することで解決されることがありました。

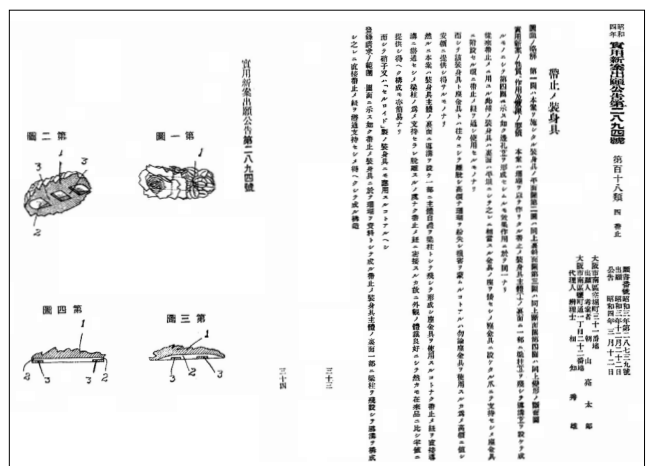
出願内容の傾向を掴むことで、時代背景や流行との関係が見えてくることもあります。例えば、昭和、特に戦後の帯留の出願では、帯留がブローチやペンダントトップなどとしても使えるようになってきているもの(逆に、帯留としても使用できるブローチやペンダント)が増えてきます。これは、着物より洋服を着ることが日常的となり、帯留としての使用だけではなく、洋服にも合わせる事が出来る汎用性の高い装飾品が求められるようになった結果だといえます。出願内容には、この様な時代の風潮が反映されていることが多々あります。

さらに、出願されている地域から、その地域の伝統工芸品や産業との関連が見えてくることもあります。特に、帯留に使用されている材料などは、その地域の工芸品や産業と密接な関係を伺うことが出来ます。例えば、京都からは刺繍作品を嵌め込んだ帯留、佐賀からは陶器の帯留の出願が複数出されています。

これまで服飾の研究ではあまり使用されてこなかった産業財産権資料ですが、このように近代以降の研究を行う際には有効な資料になり得るのではないのでしょうか。

今回は帯留発生と進化についてのざっくりとした話と、帯留に絡め産業財産権資料の活用についてお話しさせていただきましたが、帯留の魅力と産業財産権資料の有効性が少しでもお伝えできていればと思います。

発表の機会を与えていただき、ありがとうございます。



(昭和4年実用新案出願広告第2894号「帯止メ装身具」)

2023 (令和5) 年度 論文発表会の報告

2023年度の論文発表会は2024年2月17日(土)13時10分より和洋女子大学東館16階会議室で開催された。今回の論文発表会は新型コロナウイルス感染症対策のために中止や、Zoom開催を経て、4年ぶりに対面での開催となり、参加者は36名であった。

玉田真紀会長の開会の挨拶では、「ここに至るまでの4年間、修士は2年間真摯に研究に取り組んだ成果を緊張せずに発表してほしい。学内での発表とは違い、このような場で発表しようという前向きな気持ちは良い経験となると思う。本日の発表会を将来の糧としてほしい。」また「研究者として、学生の研究成果を聞くことには喜びがあり、これから社会に出てどのように花開いていくのかが、楽しみである。」とのエールが送られた。

発表数は卒業論文4件、修士論文3件、計7件であり、発表の概要は以下のプログラムの通りである。

〈プログラム〉

開会の挨拶 会長：玉田 真紀 (尚絅学院大学)

【卒業論文】

◆座長 畑 久美子 (愛国学園短期大学)

1. 異素材mixによる「nature」を表現した衣装制作
館石 結奈 (和洋女子大学)

◆座長 畑 久美子 (愛国学園短期大学)

2. 日韓文化受容に見る日本における韓国ファッション
長谷川 莉央 (実践女子大学)

◆座長 中西 希和 (跡見学園女子大学)

3. もの派からのデザイン発想及び実物制作
SHEN SHUTIAN (文化学園大学)

◆座長 沢尾 絵 (東京家政大学)

4. 打敷の修復保存に関する研究
—制作年代の判定・科学分析・応急修理について—
青木 麻依 (発表者) (共立女子大学)
島田 玲花 (共立女子大学)

【修士論文】

◆座長 沢尾 絵 (東京家政大学)

5. 江戸時代における小袖雛形本刊行の社会的意義
—その鑑賞と実用の実態について—
石原 ひなの (共立女子大学大学院)

◆座長 新實 五穂 (お茶の水女子大学)

6. アーミッシュの衣生活に見るmodestという理想像
松江 渚 (日本女子大学大学院)

◆座長 新實 五穂 (お茶の水女子大学)

7. 中世写本にみる美化された衣生活
—『ベリー公のいとも豪華なる時禱書』の服飾描写より—
新井 翠 (日本女子大学大学院)

閉会の挨拶 副会長：田中 淑江 (共立女子大学)

【卒業論文】

1 件目発表予定の館石結奈さんは一身上の都合のため、やむを得ず欠席となった。

2 件目は実践女子大学の長谷川莉央さんによる「日韓文化受容に見る日本における韓国ファッション」である。ファッションを含めた観点から日韓関係を論じた論文が少ないことからファッションという新たな視点から日韓関係と日本ファッション産業について調査し、今後の日本における進展とファッションを中心とした日韓交流について考察することを目的とした研究である。本来の韓国初のデザインが、新たなファッションスタイルとして確立されていくことを示唆した。

3 件目は文化学園大学のSHEN SHUTIAN (シンジョテン) さんによる「もの派からのデザイン発想及び実物制作」である。「もの派」とは1960年代末から70年代にかけて現れた、主に木や石など自然界の物質・物体と紙や鉄材などニュートラルな素材を、ほぼ未加工のまま直接的に展示することで、モノはもはや素材という客体ではなく存在そのものになることを示し、後の美術潮流に大きな影響を及ぼした日本の芸術運動である。これまで、もの派とファッションを結びつけた研究はほとんど見られないが、もの派の空間観や自然観を考察したうえで、衣服と身体の関係性に焦

点を当て、実物制作に取り組んだ研究である。通常、衣服に用いられない硬い竹の特性を活かして柔らかい体の間に空間を作りだし、モノと体が織りなす新しい空間性を提示した。

4件目は共立女子大学の青木麻依さん・島田玲花さんの共同研究による「打敷の保存修復に関する研究—制作年代の判定・科学分析・応急修理について—」である。発表は青木麻依さんである。現在美術館や博物館に所蔵されている貴重な染織文化財を後世に残すためには詳細な調査と慎重な修復が必要であるが、作品の調査による制作年代の把握とともに、作品に適した応急修理を検討し、実践することで安全に保管することができるようにすることを目的とした研究である。応急修理を施すことは貴重な染織文化財の調査に影響がなく、安全に保管できる状態にし、後世に残すために必要不可欠な研究であり、更なる研究を期待したい。

休憩を挟み修士論文の発表が行われた。

【修士論文】

5件目は共立女子大学大学院の石原ひなのさんによる「江戸時代における小袖雛形本刊行の社会的意義—その鑑賞と実用の実態について—」である。小袖雛形本とは寛文6年に始まり19世紀前半にその出版を終えるまでの約150年間に刊行された小袖模様のファッションブックであり、当時の染織技法や模様様式の時代的変遷を究明する上で重要な意味を持っている。この小袖雛形本の機能における、呉服注文での実用的な側面と絵画を中心に楽しむ鑑賞物として側面、それぞれの側面の調査および分析を行い、最後にそれぞれの流れの整理を行うという新たな側面からの研究であり、今後の研究の展開が楽しみである。

6件目は日本女子大学大学院の松江渚さんによる「アーミッシュの衣生活に見るmodestという理想像」である。アーミッシュに存在するオードヌングと呼ばれる不文律の戒律を分析し、その中で重んじられるmodestという概念が衣生活にどのように影響しているかの調査と衣生活の実態を明らかにすることを目的とした研究である。その結果、modestとは身体的・精神的に遵守すべき前提であると同時に手の届かない理想であること、神に仕える者として正しい在り方であり、それは心身ともに信仰に誠実であろうと実践することによってのみ実現できるものである。また

アーミッシュが揺るがない信仰を掲げて生活し、その在り方が世俗と対照的である程に、彼らの衣服はmodestという規範と理想の象徴の役割を担うものであると提言した。

7件目は日本女子大学大学院の新井翠さんによる「中世写本にみる美化された衣生活—『ベリー公のいとも豪華なる時禱書』の服飾描写より—」である。中世末期の美術品の傑作の一つである『ベリー公のいとも豪華なる時禱書』の暦挿絵における服飾描写はどのような役割を担っていたかを明らかにすることを目的とした研究である。暦挿絵に描かれている服飾描写の分析、服飾描写の独自性の考察などを行った結果、暦挿絵の服飾描写は、階層を明示すると同時に、鮮やかな色彩、特に青色をもって着用者を美化するという、現実的な社会階層観の提示と理想化された情景の演出の相反する二つの性格を有しているという結論に至った。

最後に田中淑江副会長より若い学生の発表を伺い刺激を受けたこと、本日の発表はどの研究も真摯に取り組んだことわかる良い発表であったこと、書き上げた論文をこのよう場で人に伝えるという経験は社会に出てからも役立つことであり、良い経験になったと思う。また研究者としてスタートする学生はさらに研鑽を積んで活躍してほしいとの激励を込めた閉会の挨拶をいただいた。



発表者 集合写真

【情報交換会】

発表会終了後、和洋女子大学東館18階WAYO DINERにおいて情報交換会が36名の参加で開催された。長崎前会長の乾杯のご発声で始まり、歓談とともに交流を深めた。最後に和洋女子大学佐久間敏子先生のご挨拶をいただき盛会のうちに散会となった。

最後に、今回学生たちに発表を促していただきました先生方、ご協力いただいた先生方に心よりお礼申し上げます。 (論文発表会担当 水谷みつ江)

*****事務局より*****

●会員異動 (敬称略、申込順)

【新入会員】

正会員 柴田佐和子 (岐阜市立女子短期大学)

石原ひなの (共立女子大学博物館)

学生会員 佐久間桃花 (大妻女子大学大学院)

【退会】

山岸裕美子

●SMOOSYをご活用ください (事務局より)

毎年、年会費を重複して過払いされる会員の方がいらっしゃいます。ご自身のお支払い状況、振込先等は会員システムSMOOSY (スムージィ) でご確認ください。この他、SMOOSYでは住所、所属の変更、領収書の発行が行えます。SMOOSYに初めてログインするときは、学会のメールが届いているメールアドレスまたは会員番号で登録できます。SMOOSYのURLは学会からのメール下部をご覧ください。ご不明な事がありましたら学会事務局までメールでお問い合わせください。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇ 近著紹介 ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

『19世紀ファッションのディテール』

監修 石上美紀 出版社 グラフィック社

発行 2004年1月25日

著者 ルーシー・ジョンストン、マリオン・カイト、ヘレン・パーソン

翻訳 ダコスタ吉村花子

ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館のキュレーター出身者3人の著者による、2016年出版の19th-Century Fashion in detailの日本語訳。detailに焦点を当てた本書は、衣服外観の全体像に偏りがちなファッション史の解説本とは一線を画す。男女の服飾の裏に隠された流行の諸相、傑出した仕立ての技術、人間の飽くなき「装飾願望」などを、鮮やかなカラー図版で目撃する愉しさを味わっていただきたい一冊です。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇ 展覧会のお知らせ ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

■「日本にミニがやってきた！」

4月10日 (水) ~ 7月31日 (水)

杉野学園衣裳博物館 (<https://www.costumemuseum.jp>)

10:00~16:00 休館日: 日曜日・祝日・大学の休業日 *土曜日はHPでご確認下さい。

ロンドンのストリートファッションから生まれ世界的に大流行したミニスカートは、1960年代後半の日本の女性達の間にもミニスカート旋風を巻きおこ

しました。本展ではミニスカート流行のただ中にドレスメーカー女学院で制作された1960年代のミニ丈の装いと共に、日本におけるミニスカートの登場について紹介します。

■「格式の美 -丸紅コレクションの能装束-」

丸紅ギャラリー (<https://www.marubeni.com/gallery/>)

9月24日 (水) ~ 10月26日 (土)

■「滑稽にして洒脱-狂言装束の魅力-」

共立女子大学博物館 (<https://www.kyoritsu-wu.ac.jp/muse/>)

9月30日 (月) ~ 11月30日 (土)

至近距離にある2館で同時期に能装束と狂言装束の魅力を堪能できるコラボ企画です。

■“オモシロイフク”大図鑑

3月11日 (月) ~ 6月22日 (土)

文化学園服飾博物館

10:00~16:30 4/19、6/7は19:00まで開館 (入館は閉館の30分前まで) 休館日 日曜、祝日、振替休日 ※5/26、6/16は開館です。

驚きや知恵が詰まった約30か国のバラエティーあふれる衣服を紹介します。私たちの固定概念を超える多様な衣服造形をお楽しみください。

◆東京家政大学博物館デジタルコンテンツのご案内

東京家政大学博物館は、ホームページやアプリなどで様々なデジタルコンテンツを公開しています。「収藏品データベース」では、これまでに公開している「裁縫雛形」「グアテマラ民族衣装」「台湾先住民の民族衣装」等に加え、令和5(2023)年度に「西洋服飾」63件の情報を追加しました。調査・研究や授業等でぜひご利用ください。

<https://www.tokyo-kasei.ac.jp/academics/museum/digitalcontents.html>



東京家政大学博物館デジタルコンテンツQRコード

会報 No.47: 2024(令和6)年3月30日発行
編集発行人: 服飾文化学会
事務局: 102-8357 東京都千代田区三番町12
大妻女子大学ライフデザイン学科工芸デザイン研究室
TEL: 03-5275-5738
E-mail: fukubunjim@gmail.com
URL: <http://fukushoku-bunka-gakkai.jp/>